



Title	アドルノ哲学のアクチュアリティー
Author(s)	河原, 理
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3169083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	かわ 河	はら 原	まこと 理
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)		
学 位 記 番 号	第 1 5 1 2 2 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成12年 3 月 24 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間学専攻		
学 位 論 文 名	アドルノ哲学のアクチュアリティ		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 三島 憲一 (副査) 教 授 木前 利秋 教 授 奥 雅博		

論 文 内 容 の 要 旨

今世紀の初頭に生を享け、二つの世界大戦を生き延び、六十年代に起こった世界的な学生運動のさなかにその生を終えた Th・W・アドルノは、哲学者、社会学者、美学者であるにとどまらず、さまざまな文芸批評を執筆し、また音楽家として自ら作曲をものするような、いわゆるアカデミズムを超えて精力的に活動した人物であった。そうした経歴からも華やかに生きたとも思える彼であるが、彼の思想は、その生きた苦難の時代に起こった出来事からさまざまな影響を受けている。特に、第二次世界大戦中には、ユダヤ人であるというその出自から、亡命を余儀なくされたこともあり、常に彼の思想にはある種の「暗さ」がつきまといっている。

しかし、現在、その思想の重要性を指摘されることしばしのアドルノ哲学も、まさにこの「暗さ」ゆえに否定的に捉えられもする。本稿でわれわれがなそうとするのは、このアドルノ哲学に影を投げかけている「暗さ」を突き止め、その「暗さ」こそがアドルノ哲学に生氣を与えるものであることを提示することである。

本稿では、多岐の分野に亘るアドルノの思想を論ずるにあたって、大枠で言えば、認識論と「文化批判」を二つの柱として、この問題を扱うことにする。前者は哲学の問題であるが、後者の「文化批判」の問題においては、文化はもちろん、社会学的な時代診断についてのアドルノの論考をも吟味することとなる。この二つの枠組みの中でなされるアドルノの批判はともに、全体性批判に辿り着くものである。第二次世界大戦中に現象した全体主義を目の当たりにし、全体性批判を展開した彼の思想の「暗さ」と、その中に潜んでいる全体性の克服に向けてのモメントを究明することが本稿の狙いである。

彼の思想には確かに難点もあり、アドルノの時代と比して現代においては全体主義の危険は薄まってはきている。だが、このアドルノの「暗さ」に対して、いたずらに拒否の姿勢を見せ、全否定するのではなく、限定否定的に受け入れることこそがなされねばならない。本稿の結論は、そうした限定的否定としてのアドルノ受容こそが、アドルノ哲学にアクチュアリティがもたらすというものである。最終的には、この結論を踏まえて、今後のあるべきアドルノ研究の展望を述べて、本稿は閉じられる。

論文審査の結果の要旨

今世紀ドイツのもっとも重要な哲学者の一人であるアドルノの思想の哲学的側面を、〈客観の優位〉という標語で捉え、かつその構想が初期のフッサール批判から、戦後のエッセイ集や最晩年の大作『否定弁証法』にいたるまで一貫して堅持されていることを、さまざまな資料にわたって周到に後付け、さらには、そうした〈客観の優位〉の思想が、全体主義批判に深く組み込まれており、また戦中・戦後の文化産業批判の基盤をなしていることを論じたのが、本論文の骨子である。デカルトからカントにいたる近代の認識論は、基本的には主観性の自己確証を目標とし、同時に一切の出発点ともしていた。それに対して、アドルノは、すでにカントにおいて、実はそれには解消しきれないもの、つまり、概念的構成だけでは処理しきれないものが、社会にも、そして就中、自然にも、〈特殊性〉、〈偶発性〉、〈物質性〉として内属していることが気づかれており、だからこそカントにおいて形而上学の否定のなかにも形而上学的救済への願望が生きていることを、論じている。だが、アドルノがカントに指摘したこの側面はアドルノの中でも、単なるカント論の一環として、いわゆるアドルノ・ファンのなかではあまり重要視されてこなかった。なんといっても、『啓蒙の弁証法』や、アウシュヴィッツをめぐる彼の論述の方が、注目を集めたからである。本論文は、知的ジャーナリズムでもてはやされてきたアドルノの仕事が実はいかに哲学史の再読によって成り立っているかを詳しく論じている。このことは、本論文の最大の眼目であるアドルノのフッサール批判との対決にも現れている。フッサールの「論理的即自存在」が、古典的な形而上学と無時間的な実証主義のあいだの過渡期に位置し、社会批判の側面が一切欠如していることを批判するアドルノの思想を巧みに本論文は描きだしている。さらには、あくまで〈自然〉、つまり〈客観性〉をめぐっているこの思想が、人間の知識に簒奪されない〈自然の復権〉というドイツ系ユダヤ思想の中心問題をめぐっていることをも読者に感じとらせてくれる。時として、フッサール自身の中にある形而上学批判を見逃していることをアドルノに指摘する注意深さも備えた論述は、審査教官に好評であった。

また、こうした思想と全体主義批判、アウシュヴィッツをめぐる議論との関連を描いた後半はややなまごなれであるとはいえ、十分に説得的であった。

これまで日本においては、アドルノの人物に焦点をあてた評伝やエッセイが多かったが、こうした〈私小説的〉叙述は、それなりにすぐれているとはいえ、国際水準でなされる理論的議論の土俵とは無縁である。それに対して、今世紀前半の現代史の悲劇とも結びついているアドルノの知的生涯をあくまで理論面から扱った本論文は、日本語によるアドルノ、及びフランクフルト学派研究のテイク・オフがはじまりつつあることを予感させてくれる力作である。